1日量8～9mg を80日間行い，当初 GFR 30ml/分であったが，治療後69ml/分にまで改善した。本症例はSLE 腎症に対し抗凝固療法を用い著効を奏したのでここに報告する。

7. 国立佐倉療養所における急性腎不全例について

宍戸英雄，遠藤保利，橋爪藤光
（国立佐倉療養所）
桜庭庸悦，蜂巣　忠，柏原英彦
横山健郎（同・外科）

8. 出血傾向を認めた一家系

隆　元英（上都賀総合）

頭部打撲後に皮下血腫を生じ穿刺後止血が困難であった29歳の女性に遭遇した。家族歴，既往歴に出血傾向を認めた。Rumpel-Leede 陽性，出血時間延長，PTT 延長，PPT 正常，血小板数，形態正常，von-Willebrand 病を疑うも確診に到らず，同時期に患者の妹が済生会宇都宮病院に同様の症状にて入院。第Ⅷ因子測定，リストセチン凝集等の結果 von-Willebrand 病と診断された。当院例も同疾患に相違なしと考えられた。

9. 好酸球増多を伴った肺陰影1例

飯田真司（上都賀総合）

好酸球増多を来たす疾患は様々あり，このなかに，レフラー症候群，PIE 症候群など軽症のものから，好酸球性白血病のように重症のものまで一括して，“hypereosinophilic syndrome”とする概念がある。今回，肺陰影に伴う好酸球増多症で，レフラー症候群を思わせる一例を経験したので報告した。

10. 皮膚病変を初発症状とした悪性リンパ腫の1例

後藤信昭（沼津市立）

皮膚病変を初発症状とし，急激に進行して早期に臨床病期分類で4期を呈した悪性リンパ腫を経験した。患者は17歳の男性で，腹部から胸部にかけて，中心に皮下腫瘤をもつ散在性の紅斑から発症した。その後1カ月間で皮疹は顔面と四肢末梢側を除く全身にひろがり，表在リンパ節は両側性に頸部，鎖骨上窩，腋窩および鼠径リンパ節腫脹が出現し，当科入院となった。38°C 代の発熱がみられたが，体重減少，盗汗，皮膚瘙痒の既往はない。入院時には肝脾共に触知せず，血液学的，生化学的，血清学的に異常所見がみられなかった。左頸部リンパ節の生検による病理学的所見は，Reed-Sternberg 細胞は認められなかったが，組織球の浸潤の中に，ホジキン細胞と思われる臣細胞がみられ，その一部は核が鏡面像を呈していたためホジキン病が強く疑われた。

11. 急性前骨髄性白血病の1症例

○鈴木紀彰，横須賀収，稲毛博実
森博通，松村康一（君津中央）
重田英夫（千葉ガンセンター）

我々は今回急性前骨髄性白血病の一例を経験したので発表する。患者は36歳の男性で，主訴は出血傾向だった。入院時，末梢血では赤血球，血小板は減少していたが，白血球は4800だった。分画中，前骨髄球が40%認められた。骨髄では細胞数58.2万，分画中，前骨髄球が81.4%を占めていた。治療は DCMPV で，D1C を防ぐ意味でヘパリンを使用した。経過中白血球は著明に減少し，血小板は増加傾向を見たが，頭蓋内出血で死亡した。

12. 肝内胆汁うっ帯型肝炎の一症例

杉田敏夫（上都賀総合）

全身倦怠感，食欲不振を主訴とし，高度の黄疸を呈した74歳の女性で，血液化学検査より閉塞性黄疸を疑がわせたが，PTC Echo 等により肝内胆管の拡張を認めず，腹腔鏡・肝生検により肝内胆汁うっ帯型肝炎の診断を得た。ステロイド剤投与により自，他覚所見の著明な改善を見たが，まだ LAP，r-GTP は高値を持続し，今後の経過が興味深い症例である。

13. 熱滞熱マラリアによる肝障害の1例

稲毛博実，横須賀収，鈴木紀彰
森　博通（君津中央）

熱滞熱マラリアの一例。32歳，男。南方のジャングルより帰国後2日目に発熱，関節痛，褐色尿にて発症し，第7病日に高度の黄疸の出現を見，当院に転院した。血中よりは，Plasmodium falciparum の幼若型(ring form)及び半月体（gametocyte，Halbmond）が発見された。肝は1.5 QFB 触知し，肝機能では，膠質反応，トランスアミナーゼの上昇を見た。肝スキャンでは，肝は腫大していた。発熱は，Resochin 投与とともに解熱した。